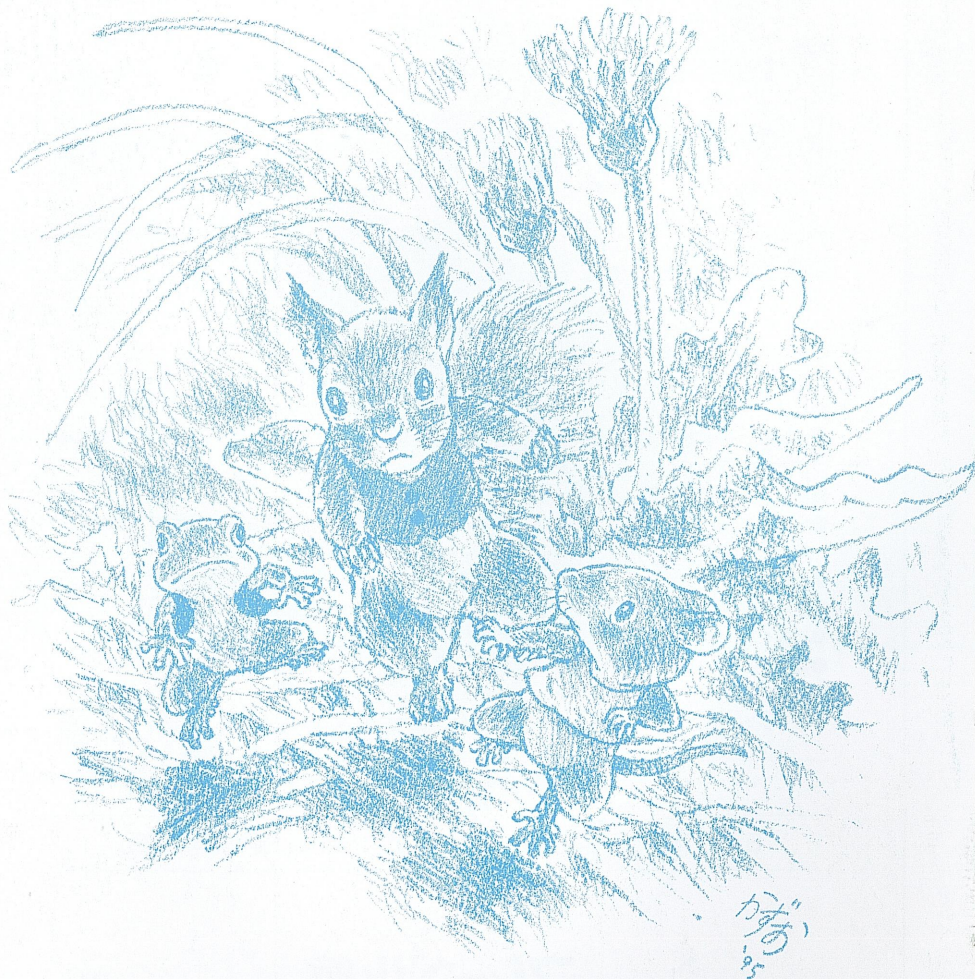
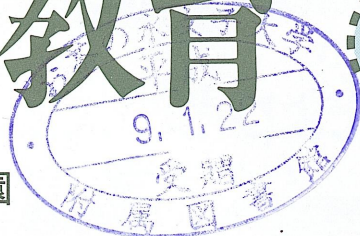


幼児の教育

'96
5月号

家庭—保育所—幼稚園



新保育デザイン12ヵ月

〈ワイド判〉

園だより・クラスだより・行事だより

1 4・5・6・7月



2 8・9・10・11月



3 12・1・2・3月



本書の特色

- 原寸大で、そのままコピーできる。
- 幼稚園と保育園の両方の“たより”例があり、どの園でも利用できる。
- 月毎に、年間の園だより、クラスだより、行事だよりがあり、どなたにも利用できる。
- 月毎に、子どもの生活、植物、花、動物、虫、自然などのイラスト・カットがあり、季節感が出せる。
- 月毎に、年齢別実例があり、どのクラスでも利用できる。
- 全巻とも同じテーマを4人のイラストレーターが取り組み、個人別に並べられているので自分の好みに合わせて使え、個性的な“たより”が作れる。
- 月単位で、項目別と同じ順番で並べられていて、取り出しやすく、年間を通して手放せない。
- 見出しを上手に組み合わせて親しみやすいたよりづくりができる。
- 下敷に使って、きれいな誌面づくりができる。
- 数字、記号、かざりケイなどを上手に使ってたのしく見やすい、たよりづくりができる。
- 生活グッズ、子どもと大人の姿、自然現象など、パラエティーに富んだイラスト・カットは、おたよりの他、いろいろなものに利用できる。

新刊

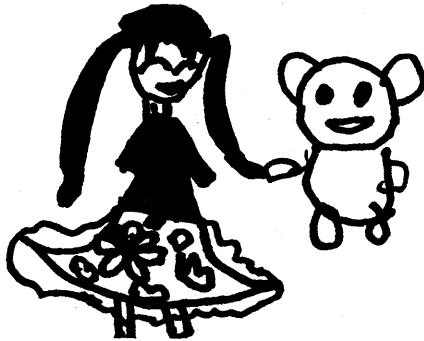
阿部 恵・編著

B4判・96頁・定価各2,200円(本体各2,136円)・セット価6,600円(本体6,408円)

キンダーブックの
フレール館

幼児の教育

第95巻 第5号



幼児の教育 目次

第九十五卷 第五号

二十一世紀にむけて幼児教育を考える(2)

好奇心にみち、とらわれることなく、

現実から学ぶことができるように……………長畑 正道…(4)

エレン・ケイ『児童の世紀』を読む(2)

—「子どもの固有の世界」を尊重すること……………津守 真…(7)

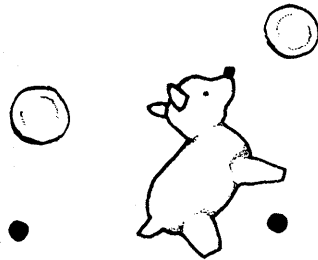
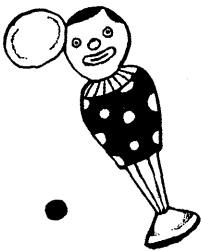
五月の山小屋にて……………清水 光子…(13)

子ども時代と私……………水野 梯一…(16)

震災後の子どもたち(8) 親の生活の再建を一刻も早く……………田中 英雄…(22)

保育の実践研究について考える……………榊田 正子…(28)

© 1996
日本幼稚園協会



四季の庭・四季の道 子どもと一緒にたのしむ

春まき草花二種 キンレンカとフウセンカズラ……………浅山 英一…(32)

「こどもテレホン相談」から③

お母さんのぬくもりから離れて初めての集団生活へ……………小島 直美…(39)

選ぶのは、子ども……………田中三保子…(47)

ある日の育児日記から⑥……………佐藤 和代…(55)

東欧の子どもたちと幼児教育①

ブルガリアの保育の現状と子どもたち……………入江 礼子…(56)

表紙絵・いわむらかずお「なにかありそうだ」

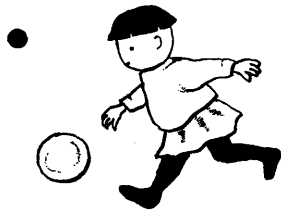
扉題字・津守 真

扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園児

カット・彌永たたえ「ボールで遊ぶ」

編集委員・田代 和美／伊集院理子・高橋陽子

編集部・仲 明子



好奇心にみち、とらわれることなく、

現実から学ぶことができるように

長畑 正道

一九八九年にベルリンの壁が撤去され、冷戦が
終って丸六年が経った。この間、世界の情勢は大
きく変ったが、わが国の変わり方も著しい。自民党
単独政権の終焉という政治の大きな変化があった
が、経済も激変に見舞われている。バブル崩壊に
よる不況といったことだけではなく、鉄鋼、自動
車、家電といった中心的な産業の拡大はとまり、

明らかに縮小に転じ、そうかといって今後どの方
向へ転換すべきか明らかでなく、手さぐりの段階
である。

それはかりでなく、私たちの日々の生活の過し
方、そして何よりも幼い子どもをどのように育て
て行くのかという目標について、大きな迷いがみ
られる。

このような問題の解決の糸口を見つけるに当っては、現在の状況をどう捉えるかが、何よりも重要である。明治維新から現在までの日本の進路は、太平洋戦争という道を間違えた一時期があったものの、徳川時代の封建体制から脱却し、近代社会をつくり上げ、国の富をふやすということであった。今、問われているのは、このような当初の目標を達成して、これからどのように進むべきかということである。しかも、もはやお手本となる先進国はなく、われわれ自身が目標を見出し、その表現への道筋を創造して行かなくてはならない。

このようなとき、一番参考になるのは、明治維



新のあと、先人達がどのように日本の近代化の道を創造して行ったかを、ふり返ってみることである。その当時、意外にも、非常に創造性に富んだ多くの人物が登場し、活躍していたことを見出すのである。しかも、政治や経済の領域では、正規の高等教育をうけることなく、むしろ現実を直視し、現実から学ぶということ、そして必要に応じて、社会的に相当の経験を積んだことから、広く世界の知識を学ぶことを忘れなかったことが注目される。伊藤博文は明治憲法をつくり、そして議会政治をわが国にそれなりに定着させた。高橋是清は独特の経済政策を現実を直視することを通して生み出し、ケインズ学説と基本的に同じ積極財政を昭和の大不況時に実施し、大きな成果を上げた。

文学や科学の領域では、高等教育抜きにしてはできなかったようであるが、余り整備されていない日本の大学で学び、そのあと外国に留学して直

接欧米の文物にふれるということを通して、独創的な業績を上げた何人かの先達がいる。漱石や鷗外の文学作品は、彼ら自身の先に延べたような体験から生まれ、現在でも若い人々にも大きな影響を与えている。御木本幸吉は、本格的な教育を受けたことはなかったが、真珠の養殖という、当時誰も思いつかなかった新しい生物学的業績をあげ、それを企業化するという大事業をなした。漱石とロンドンで一時一緒に暮らしたこともある池田菊苗は、化学者として明治後半から大正にかけて東京帝大教授として活躍したが、独創的な調味料である「味の素」の発明者として知られている。味の素はアミノ酸の一種であるグルタミン酸のナトリウム塩であるが、池田は昆布の煮汁を分析することによって発見した。

このように見てくると、優れた政治・経済の実践や、文学や科学上の独創的な業績を生み出すには、現実を直視し、自ら考え抜き、既存の知識に

ふりまわされないことが、何よりも重要であるようである。過去の知識や技術を学び過ぎ、それに捉われると大きく道をあやまってしまう。昭和初期の指導的な軍人や官僚は、それぞれの養成機関で優秀な成績を収めた人物ばかりであったが、結局日本を太平洋戦争へと導いてしまった。

戦後五十年目の日本の現在の行きづまりを打開するには、すでにモデルのある物づくりではなく、世界中から待ち望まれるような新しい、価値のある情報を生み出し、発信できるようにすることのほか、なさそうである。

このように見てくると、これからの幼児教育は、既存の知識や技能をつめ込むいわゆる早期教育ではなく、頭や身体を使うさまざまな活動を子どもに体験させつつ、現実を直視させ、そして子どもがもつみずみずしい好奇心をいつまでも保ち続けさせることにあると思われるのである。

(文教大学教育学部)



エレン・ケイ

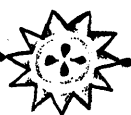
「児童の世紀」を読む(2)

—「子どもの固有の世界」を尊重すること—

津守 真

エレン・ケイが、『児童の世紀』を出版したのは一九〇〇年であった。彼女は二十世紀がどうなるか未知のときにこれを書いた。それから九十六年を経た現在、歴史の中で私共はその答えを見ている。二十世紀前半の新教育の台頭は児童の世紀にふさわしいものであったが、二度の世界大戦、それにつづく歴史を経て現代の子どもたちの姿をみると、二十世紀を「児童の世紀」と言うのにはためらいを感じる。

二十世紀の子どもの中に育てたいとエレン・ケイが強調したことが二つあったと私



は考える。ひとつは前号で紹介した「未来への意志」である。もうひとつは、「子ども
の固有の世界」である。そのいずれも、単に二十世紀の課題であるのみでなく、世
代から世代へと引き継がれる人間の教育を考えるときに、人が共通に思い浮かべるイ
メージと言ってもよいのではないだろうか。

エレン・ケイの言うところにいましばらく耳を傾けてみよう（ここに引用するのは
すべて私訳である）。

「子どもたちと遊ぶことは偉大な芸術 (art) である。子どもたち自身がしようと
していることを知らなければ彼らと遊ぶことはできない。それは大人にも特別なたのし
みを与えてくれる。そのときに大人はすべての教育的理念を忘れなければならない。
そして全く子どもの思考と想像の世界にはいらねばならない。昔ながらの満足を与え
る遊び意外には何も教えてはならない。」

私のことばで言い換えるならば、子どもが自分からしはじめる遊びに子どもの
固有の世界はあらわれる。だから子どもがしようとしていることを洞察し、子ど
もの想像の世界にはいることが、保育者には要求される。それには大人の観念の
中にあるしつけや教育の理念を念頭からはずさねばならない。

「子どもが小さな躓きをしたただけなのに、大変なことをしてしまったと思う習慣に



陥ったとき、それは太陽に一瞬かかる雲のようなものに過ぎないと、子どもがほほ笑んでそれを迎えることを教えるのは、私たち大人である。不愉快な義務にも快く直面している親を見ると、あるいはまた、厄介な出来事や不意にふりかかる困難を耐えて生き抜いているのを子どもが見るとき、子どもも同じように振る舞うようになるだろう。これが私の教育法のアルファでありオメガであるから、最初に述べたことを繰り返そう。子どもを平和の中に委ねなさい。できるだけ干渉してはならない。粗野で不純なことから遠ざけなさい。人生と人格と現実のありのままが子どもを訓練することであることを、あなたのあらゆるエネルギーと配慮をもって示しなさい。」

大人と子どもとは、生きている舞台が異なるけれども、そこで出会う危機と躓きに立ち向かう自我の力は、いずれにも共通である。子どもは生きた現実に向き、身近な大人の人格にふれて自らの人生をつくる。そのときに大人の常識的、教育的干渉が子どもに生き方を教えるのではなく、大人自身が高貴に生きていく姿が子どもの手本になる。また、子どもが生きる仕方に大人が教えられるのである。

「ある風刺作家の疑問。子孫はわれわれに何もなしえないのに、何故われわれは子孫に対して何かをせねばならないのか。この疑問は私の青年時代に考えた真面目な問いであった。私は、子孫は父祖に対して多くのことをしたと考える。父祖は、日常の限



界を超えて未来への限らない地平を子孫によって与えられた。われわれは子どもの中に人類の新しい運命を見る。われわれは子ども魂の細い糸を注意深く扱わねばならない。それはいつの日か世界の出来事を織り出すことになるのだから。子ども魂の深みを蔽う滑らかな水面を割って投げられるひとつひとつの小石は、幾世紀にもわたって波紋をひろげていくことを認識せねばならない。われわれは、父祖によって、われわれの意志や選択をこえて、運命的に、われわれ自身の存在の最も深いところをつくられてきた。同様にわれわれ自身がつくり出す子孫によって、われわれは自由な存在として人類の未来の運命をある程度規定する。」

何十代も以前の父祖から私共が引き継いでいる心の深層がある。逆に私共は未来の世代を望み見るとき、そこに引き渡していく自我の力によって、新しい未来が切り拓かれていく地平線を遙かに見ることができ。その希望が私共の現在を支えている。

二十世紀末に考えるとき、私共は未来の世代に対して殆ど不感症になっているのではないかを恐れる。それは若い人の理想を圧死させるような時代に私共が生きたからであらうか。それにもかかわらず、未来に目を開いて、地平線に光を見出そうとする意志がなければ、教育と人間の仕事は成り立たないであろう。

「これらのすべてを全く新しく認識し直し、発達という宗教の光に照らしてこの全過



程をみると、二十世紀は児童の世紀となるであろう。このことは二つの仕方で見られる。まず大人が子どもの性質を理解すること、そして子どもの性質の単純さが大人の中に保存されつづけることである。こうして古い社会秩序は革新される。」

「心理学的教育学は豊かな先輩をもっている。ソクラテスやイエスにまでは溯らないまでも、現代から始めよう。実り薄かったルネッサンスの日の出の時につづいて、春の花が枯れた木叢の中にあらわれた、教育の革新への要求は、モンテーニュという偉大な人物によって提出された。彼は現実を畏敬する懐疑論者であった。彼のエッセイ、ガルソン伯爵夫人への手紙には未来の教育のあらゆる要素が見出だされる。」

それにつづいて、コメニウス、バセドウ、ペスタロッチ、ザルツマン、フレール、ヘルバルトなどの名前があげられ、更に、プライヤー、ヴント、リボー、ビネー、クレペリンなど、古典的心理学を学んだ者には懐かしい名前が並ぶ。

この書物の出版が一九〇〇年である。それから九十六年の間に、心理学の展開には目覚ましいものがあり、その業績を数え上げることは不可能である。

エレン・ケイがここでほとんど宗教とまで言った「発達」は、二十世紀に教育を語るときには欠かせない語になった。そしてそのメリットもデメリットも私共は経験している。



私がしばしば引用する『幼児期と社会』（みすず書房 一九五二）の著者、エリック・H・エリクソンは、一九〇二年に生まれ、人間の生涯の発達をテーマとして研究し続け、その最晩年、一九八二年に『ライフサイクル、その完結』（みすず書房）を著して数年前に亡くなった。二十世紀を生きた発達研究者である。この最後の著書で、彼は、老年期を特徴づける「統合」を自分自身の生涯と重ね合わせて考え、それは「一貫性と全体性の感覚であり、物事を結合する機能である」と説明し、更に、それは乳児のときにはその世界における統合の感覚があるという。そして統合は「個人の特性であるのみでなく、人生の統合的な生き方を理解しようとする共同の性質であり」世代から世代へと引き継がれる「徳」である。更にそれは「遠い時代に、異なる追及の仕方で作されたものとの内的交流であり、……そこに遠い時代の者との時間を超えた愛も生まれる」と言う。二十世紀には、人間と社会への悲観的な材料が満ちていくけれども、私は人間の中であって世代に引き継がれる人間の精神の力を信じた。殊に言語をもたず、身体の動きを主とする幼児期には、父祖から受け継がれた人間の基礎が常に秘められている。保育はそれを保ち育てる営みである。

エレン・ケイの『児童の世紀』を読むとき、百年の歴史をあらためて考えさせられる。

（愛育養護学校）

五月の山小屋にて

清水 光子

うす緑色の、きめこまかい沙のカーテンを張りめぐらしたような榎林、まだそこにわずかに根まわり雪が残っている。光の壺の中にも迷いこんだか?と思ひ、何か酔いしれた感じでロッジに戻って来た私たちを迎えてくれた若い人に、「この枝、杖にして歩いて、とても助かったの。この次までと置いて置いて下さいね」と一メートル程の枯枝を渡しました。彼は「ええ、いいですよ。たしかに預かっておきます」と答えたのです。そのときの何と自然で気さくで、明るい態度! 清々しい雲囲気と輝く澄

んだ瞳にすっかり魅せられてしまいました。このロッジに手伝いに来ているアルバイト学生かしら、それにしても何という明るい若者だらう! ちょうどその頃知能の高い若者がいまわしい事件を起していたこともあり、何かしら救われたような思いをいたしました。

次の日、そのロッジでは俳句を楽しむイベントが、有名な俳人の先生の指導で開かれ、私も生まれて始めて「句会」に「何ておっちょこちょいな!」と我ながらあきれ乍ら参加したのでした。苦吟のあ

げく、提出した俳句を選考、指導していただく集まりの前に、国立〇〇大学大学院学生が、この辺に住む「ヒメヤマネズミ」の生態の研究をしているのでコーヒーブレイクのようなときその研究の一端を話して貰うことになったのでした。その学生が、何と、きのう、杖を預けたあの青年だったのです。メモや写真をかかえて、老若男女三十余名の前にやや恥かしげに立たれたときの驚き！そしてああ、さすが！と感じました。イエネズミより小さく、ハムスターより少し大きく野生的な桃色がかったかわいいネズミがその巢に柄の実を運びこみ、長い冬の間雪の下で生きる姿を、むしろ淡々と話されました。

俳句の先生始め、三十余名の参加者は皆一様にきき入り感動しました。それはヒメヤマネズミの生態の話が面白かったのももとより、話し手の、いかにも自然な、謙虚な態度を通して、自然の中に（地球という星の中に）生きているものに対する限りないとおしみと、自然それ自身に対してのおそれ、敬

仰の気もちを含め、なおかつ小さきもの、幼いものに対する深く厚い優しさが胸にしみ通ってくる思いだったのです。私は何年か前に哲学者のY先生が話された“アイデンティティ・クライシス”ということばがひふいと浮んできました。

“ここには豊かな自然があります” “自然を満喫しましょう” などという観光旅行の案内があふれ、連休などにはどつとお客が詰めかける。そこまでは飛行機、自動車、新幹線など文明を誇る機器で、より速く、より快適に競って……。自然を満喫などどこもかしこも画餅にすぎない現実のようです。これが豊かさの現実とは？ 数千年前文明を誇った、そして忽然と姿を消した砂漠の中の遺跡が我々に教えるものが今、改めて思われます。

真の豊かさとは何でしょうか。豊かな自然環境を二十一世紀をなう子ども達に残すとはどうすればよいのでしょうか。好奇心一ぱいの、輝いた瞳をもつ

子ども達を念じて……。

今を盛りの草や木の花々、やがて実をむすび、動物達の餌、食物になる。地に落ちて新しい命になるのはごく僅かでしょう。勿体ないような自然のいなみとそのめぐり。子ども達の、あの没頭している遊びは、将来をめざしてではなく、遊びそのものが生活なのだ、そのさながらの生活が遊びなのだと倉橋物三先生は言われました。その中で自ら育つものを育たせようとするのが幼児教育の真心まごころではないでしょうか。ホモ・サピエンスとは遊ぶものというい



みがあるように生きています。自然のいとなみの、何とバランスのとれたゆったりしたあり方なこと！忙しいとは心がないのだと字が語っています。何もかもきっちり計画され無駄を一切なくした文明都市モヘンジョダロの消え去った謎はこんな所にかぎがあるのでは、と言われます。

六月に再び訪れたロッジの玄関で、彼の青年が「はい、この杖」と、五月の時より少し日焼けした顔で渡してくれました。宝物のように受け取りました。そして、そのあと、あのネズミ達を大切にいいに山の厚い腐葉土のしとねに戻してやっている彼の姿に、又しても胸を熱くしたことでした。なお、その日、久し振りにほととぎすの声をききました。さやかに鳴きわたるかなほととぎす

なれや五月の光なるらむ（藤原俊成）

を思い出しました。幸せな思い一杯になって。

（音羽幼稚園）

子ども時代と私

水野 悌一



私は自分の子ども時代について、ここに記すことになったが、その前に少し私の考えを述べておこうと思う。ここに述べる事柄は自分史であると同時に、一九三五～一九四五年の地方都市の中流生活家庭の状態をなるべく正確に記述したものでありたいと思う。最近の我が国では、情報が満ちあふれかなり均一化した生活が見られるようになったが、一九四〇年代には東京

と地方都市の生活状態にかなり大きな差異が認められた。従って、正確な状況はもはや私の記憶からも遠ざかりつつあるが、感情をなるべく交えないで記述することは、あるいは将来何らか役に立つかもしれない。

私は、一九三五年名古屋市中小さな工業製品の製造業者の長男（姉が一人の二人姉弟）として生まれた。小学校三年生まで育った所は東京で言うならば一九七

○年頃までの田園調布のような所かもしれない。英、
独、仏、伊の公使官員や貿易商社員の住宅が多く、祭
日には母国旗と日本国旗を交差して立てられているの
が美しかったことを覚えていた。

出生時体重三五〇〇グラムで当時としては巨大児に
近く仮死状態で生まれた。いわゆる虚弱児として小学
生のうちに死ぬと思われていた。姉は幼稚園に入った
が、私は病弱のため幼稚園には行けなかった。一年の



大半を寝て過ごしたため、極めて
気難しい、意気地の無い、話さな
い、人見知りの強い子どもであっ
た。当然友人は全くできず、絵
本、積み木、機械類の玩具（ゼン
マイじかけの機関車・装甲自動車
・消防自動車・犬など）、白熊の
縫いぐるみ、三輪車、小さな滑り
台、二人乗りのブランコなどが一
人遊びの道具であった。姉は八歳

年上で遊び相手にはならず、砂遊びや水遊びはほとん
どの場合、中耳炎や扁桃炎を誘発するため禁止されて
いた。その頃、熱中した遊びは箱庭遊びだったように
思う。マッチ箱大の家、神社、鳥居、松の木、鉄橋、
汽車、豆粒大の人物、蛙、鯉、亀などが素焼きと針金
で作られ、お菓子の空き箱に入った少量の砂場にそれ
らをおくという、現在の箱庭療法を偶然にも毎日行っ
ていたことになる。一年間に十回以上襲った化膿性中
耳炎と手術、数十回以上の化膿性扁桃炎、消化不良性
大腸炎などによる高熱、痛み、嘔吐、下痢には参って
いた。

近所の公立小学校に特殊学級ができた頃であっ
たと思われるが、学齢期直前の健康診断では問題なく
特殊学級に入れられた。小学校に通い始めて驚いたの
は、自分の目には奇異に見える多くの同僚の存在で
あった。何時もよだれを流している子ども、発語障害
や言語理解不能の子ども、背骨の曲がった子ども、極
端に身長足りない子どもなど、実に様々の子どもが

いて、皆仲良くやっていた。一学年で健常児クラス約百五十人、特殊学級四十人位だったと思われる。特殊学級の授業は退屈だった。片仮名、平仮名、漢字、作文、加減算くらいで時計の読み方は自分の欠席の時期に習ったと見えて母親から教えられた。体育の授業は運動場での自由遊びやおしくらまんじゅう、あるいは鬼ごっこ程度であったように思う。二年生から特殊学級はなくなり、普通学級に編入された。理由はいまだに不明だが、担任の教師から全員に対して、学校の名称、全生徒数、校歌を暗唱させられたのには面食らった。何しろやっと、学校の名称、自分の両親と自分の姓名しか言えず、自分の住所や校歌は知らなかった。しかし、現在のようないじめ」はなかった。ただし後年、薬科大学卒業後まで友人となった麻疹脳炎後遺症の発語障害とよだれのため精神遅滞児に見えた男はかなりいじめられた。体育は徒手体操、棒のぼり、ドッジ・ボール程度で、放課時の遊びは女子のまりつき、縄跳び、ゴム跳び、男子の一種の鬼ごっこ、馬跳

び、縄跳び位であった。しかし、同年代の子どもに出会った驚きと恐れ、言葉遣いを知らないための先輩からのいじめ・同級生からのそしりのため、いつも学校は恐怖と苦痛の場となっていた。

自宅の近所に学齢児はいなかったが、唯一の同性の同級生がいた。彼の両親は共稼ぎで、昼間は全盲の祖母と妹がいた。三年生の十二月まで自宅の裏山でたった二人で戦争ごっこばかりして遊んだ。敵味方はなく、日本軍同士で戦った。当時の日本人の一般家庭は貧しく、学校給食は始まったばかりだったが、一割位は昼食の弁当を持ってこられなかった。そのため、昼食時に彼らは運動場の片隅にかたまって時間を過ごしていたようであった。

次第に第二次世界大戦での日本の敗色が強まり、アメリカ軍の爆撃が激しさを増し、四年生以上は四月から学童疎開が名古屋でも開始されることとなった。当時の男の子の将来になりたい人物は軍人（大将）だったが私には全くその気はなく、太って優しい小児科の主

治医のような医師になりたいと思っていた（現在では考えられないことだが、毎週一〜三回かかりつけの小児科医の往診があり、一応健康管理されていた）。

三年生の疎開開始までは、相変わらず中耳炎と扁桃炎で出席日数の最低線すれすれまで欠席し進級が危ぶまれていた。近所に多分学芸大学の付属小学校へ通う兄妹がいたが、こちらからの挨拶を全く無視され初めて差別のあることを後年悟った。いわゆる「いい子」ぶるつもりは毛頭なかったが、先生の教えをよく守り、神社の前では脱帽して戦勝を心から祈念し、坂道で人の引く重い車や馬車の後押しをしていた。しかし、敗戦が明らかとなりいわゆる神頼みの空しさを体験してからは、神社仏閣は観光の対象と化した。

当時は五月半ばまで学校を欠席し、七月から長野県志賀高原付近の温泉宿で九月中旬まで過ごし、（現在の東京地方ほど別荘をもつ習慣がなかったように思う）十二月からは欠席を繰り返しながら登校していた。避暑地では友人らしい者もなく、散歩をしたり、

虫取り網を振り回し、時々温泉プールの中を歩き回る程度で、水泳は習う機会もなく、できなかった。両親はたった一人の男の子が虚弱児であり、成人するとは考えてもいなかったため、学業は一切無視し、ただ健康に毎日が送れるならばと考えていたようであった。学校の行事の中で一番嫌いだっただのが、運動会と学芸会であった。ともに、長期欠席児童にとっては訳が分からず病気のせいもあって、たいていは欠席した。その代わり、偉人伝、国内外の神話、童話、子ども向けの小説、科学解説書、姉の影響による少女小説などはおおいに読みあさり、社会性発達の不足分を多少なりとも補った。

三年生十二月からは個人疎開（特別の理由のある家庭に認められたもので、個人単位の田舎への疎開。大部分は学級単位で担任教師が引率して田舎へ集団疎開した）で母親、姉、私の三人が現在名古屋市となっている農村地帯へ疎開し、自宅には父親だけが残った。疎開を機に、かなり健康となった。言葉と服装の違い

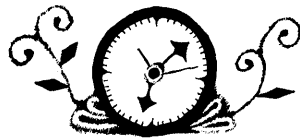
が原因と思われるが、田舎のガキ大将に石、土くれ、雪の塊、稲の切り株を投げられ、下駄で殴られてひ弱な都会の子はすぐ不登校となった。後年、ガキ大将と再会しいじめの理由を尋ねたがよく分からなかった。

アメリカの空襲が激しさを増し三月頃からさらに山奥へ逃げ、現在は岐阜県中津川市と思われる山間の小学校へ転校した。子どもの足で一時間はかかるため、毎朝七時三十分には家を出た。この小学校でも再びい

じめに会い、一時不登校を起こしたが、次第にたくましくなり五月からは比較的元気に登校した。この時期に、名古屋の自宅は焼夷弾爆撃で焼失し、命からがら逃げ延びた父親は岐阜県の田舎の疎開地へやって来た。しかし、教員不足のためかこの小学校では、ストープ用の薪運びと便所の人糞を畑に肥料としてまくことを初めて経験して夏休みとなり、八月には日本の敗戦となって九月には最初の疎開地の名古屋近郊の田舎の小学校へと逃げ戻った。子ども時代の健康状態を後年回顧してみると、虚弱児をさらに虚弱にした原因

は過保護にあったのかも
しれない。それが、疎開
によって母親のある程度
の保護の元に解放され年
齢的成熟も加わって健康
を取り戻したようであ
る。

名古屋近郊の小学校は
約一年前と同じ状況であ
り、健康をとりもどしか
なりたくましくはなっ
ていたが、全く目立たな
かった。世の中は騒然と
して泥棒、暴動などの小
さな事件はあったが、
父親は無職となり預金
も自由に引き出せない
時代であったため、野
菜、小麦、薪は自宅で
生産した。人糞を畑にま
くことは私が父に伝授
して一人得意になっていた。
敗戦からしばらく後の
一九四六年春頃から、
栄養失調のため、外傷
がほとんど化膿し、我々
男の子どもは特に悩



まされた。数年間は抗生物質も高価すぎて入手できず、わんぱく坊主共は厄介な化膿症に泣いた。一般の家庭では石鹼不足、殺虫剤不足のため蚤、虱がはびこり発疹チフスが流行したため、現在は発癌性物質として製造禁止となったDDTを無害と聞かされ、頭から散布されたり、家庭用に配布されて大量に散布したシートにくるまって眠った。



第二次大戦開始以来十年近く工業薬品の製造を休んでいた父は、重い腰を上げて工場経営を再開した。昔風の手堅い企業経営では、うまく行くはずがない戦後の混乱時代であった。当時は外地（満洲即ち中国東北部、韓国や北朝鮮、タイやフィリピンなどの日本の植民地など）からの引き上げ者などは、生きるために必死に働き多くの成功者を出していた。そんな人々に交じって律義一

本の経営方針が成功するはずはなく、経営状態はかなり苦しかったと想像される。しかし、昔気質の父は、「俺の目の黒いうちは、名古屋から離れるな」を繰り返し、極めて頑固だった。私はそこで二つのハードルを越えなければならなかった。つまり、家業を継がず、医学部に行くことと名古屋を離れることである。

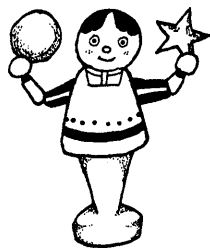
薬学部へ行かず医学部へ行くことは、母親が一応賛成してくれたこともあり、父の許しが出るまでに数年を要したが、名古屋を離れることだけは最後まで認められなかった。

中学校へ入ってからは一年間の欠席日数は一、二週間程度となり、とっくの昔に死んだはずの子どもは比較的元気で勉学にいそんでいた。しかし、体育の成績だけはいつも最低でありそれ以後四十年たっても、体育の授業で教師から叱られている夢を時々見る。このような子ども時代を過ごした私が、名古屋を離れ東京の住人となったのは、やはり父の死後であった。

(お茶の水女子大学)

震災後の子どもたち(8)

親の生活の再建を一刻も早く



田中 英雄

今回の震災が乳幼児に与えた精神的影響が量り知れないものである事は容易に予想されるものであるが、それが一体どのような全体像を形づくっているのかという事は、今後にまたなければならぬ。

それは、私の個的狀況からきている事も断っておかねばならない。

ちびくろ保育園は激震地より約五百メートルほどだろうか南に位置している事もあり、壊滅的打撃よ

りまぬかれた。一階の半分がピロティ構造になっていたので、もし、激震地にあれば倒壊していたか、大きな亀裂が入り結局は解体せざるを得なかったらう。そういう意味で多少の修復や耐震壁を今後の大地震を想定して設けたりせざるを得ない事はあったが、他に比べれば「無傷」に近かった。

自分の自宅が「全壊」状態であったので、保育園に移らざるを得ず、そうこうしている中に、全国か



らかけつけて来られたボランティアによって救援基地と化し、その様な渦の中から、「ちびくろ救援ぐるうぶ」が発足し、主に小規模な避難所六十か所の救援活動を手がけ、現在も各地にある仮設住宅に対するボランティア活動が精力的に続けられている。

それと平行して、永年取り組んで来た「ラミ中学校」（不登校や障害のある子どもでも、自由に生き生きと学び、生活する学校・魂の成長を大事にする）の設立（去年の十一月二十六日に開校）や、遊び場を失くした（ほとんどの公園は仮設住宅で埋まってしまった）子どもたちのための「須佐野子どもテント村」の運営など、震災以後の日々は震災以前と全く様相を異にしており、保育園の事にも精力を集中しておれば良いような日々などほとんどなかったに等しい。

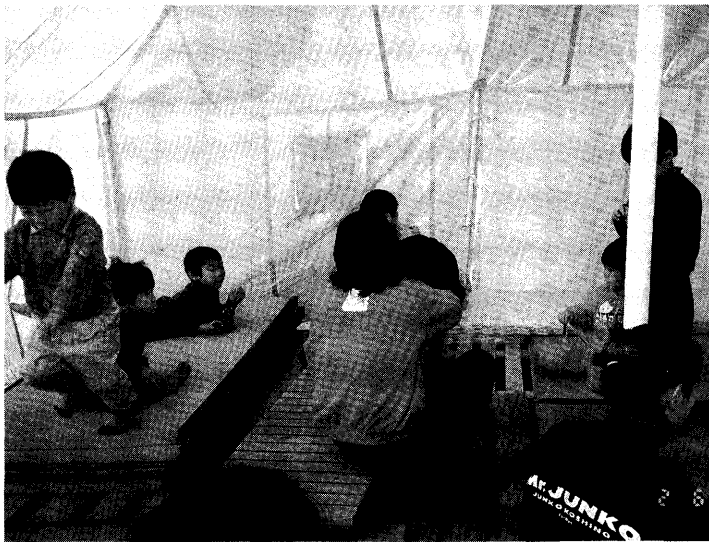
その様な状況なので、十分に子どもたちの事が書けない事を断っておきたい。その上で限られた経験の中で感じた事のみ述べてみることにする。



▲全国からのボランティア（95，2，4）

地震で受けたショックの事について

保育園が救援活動に平行して保育を全面的に再開した二月一日、登園した子どもたちの表情は固く、からだも固くこわばっていた。中でも情緒障害的傾向のあるあー君は土気色をしており、母親のからだをたたき続けていた。また、地震時に二階にいてタンスの下敷きになった子は二階に寝ようとはせず（二階は危険なので）親を困らせたという。この恐怖は一年たった今でも大人である我々の中にもあるが、地震を頭で理解して納得させてしまう事をしない子どもたちには長く続いたものと思われる。地震後五か月近くもたった初夏のある夜、中学生で障害児学級に在籍するひで子ちゃん、私はずねていったその日家の外の暗がり立ち続けていて、仲間中に入ろうとしなかった。母親に聞くと家の中に入るのをこわがっているとの事だった。四階建のマンションは骨組がしっかりしている故に倒壊せず



▲組み立てられた救援テントの中で遊ぶ

に立っているとはいえ他の家族は全ておらず、彼女の家族のみ住んでおり、内部が激しく破壊されたま

まの部屋の様子が無気味に見える状況から見て、彼女の恐怖の方が当然だと思えた。

再開した保育の中である保母が子どもたち一人ひとりと話しながら描いた壊れた家の様子は、子どもたちの受けた衝撃を如実に物語っていて、よくその中で大きな怪我もせず生きてこれたと感謝するばかりであった。

保育の再開を急いだ事は良かった。園庭やピロティの天井にまで山積みされた救援物資。五百人や千人程度の炊き出し作業が続いている日々の中で、保育を安全に行い得るかどうかなどの状況（救援活動はその後大急ぎで近くの公園への移設が完了したのであったが）があったが、救援活動と混在して保育があったも、いい面もあると考え決断した。

震災以後、子どもたちの遊び場はほとんどなくなったといっている。家の周囲はくずれかかったビルや家屋、その上に解体にもなう土ぼこり、道路は渋滞しダンブの列が続く日々。公園という公園は

たとえ二棟であれ三棟であれ、建てる広さがあれば仮設住宅が建ち並んでいった。

三月の末に卒園した子どもたちの親が学校の入学までの二週間、一体どこで子どもを遊ばせればいいのかと悲鳴をあげた。その訴えに応えるために永年教育問題に取り組んで来た仲間と共に地域の子どもたちが自由に来て遊べる「須佐野子ども村」を急拠開設することになった。この「子ども村」は大うけで、地域の小学生たちが、喜んで集まるようになり、その後外国の救援組織の補助金も入ることになり、六月からは二名のスタッフを常駐させる事が出来るようになり、今日現在も続いている。

この「子ども村」のある公園は、当園から出発した「ちびくろ救援ぐるうぶ」の事務所や物資テントやボランティアの寝とまりする数多くのテント、それに被災した障害者たちを介護するプレハブと共同形仮設住宅が三棟も立ち並び、三〇〇〇坪の公園も今や、スペースが残り少ないのであるが、その空地

に手作りの巨大なすべり台や手作りプールも設けられ、それらの空間をぬって子どもたちは走りまわっている。地震直後どうだったかということ。「子ども村」のスタッフ丸さんは「子ども村だより四号」の中で次のように報告している。

子ども村にきている子のお母さんからこんな話をきいた。「あの子、今ではあんなにあそんでいくけど地震から三日間口がきけなかったんですよ」その子の家はマンションのかなり上の階だったらしく、地震の時、その子の目に映った恐怖というものは、はかり知れないものであったと思われる。そんな彼も子ども村では木工あそび大得意の一人である。……けれど日常の表情の奥にしまこんだ傷やショックを彼らなりに一年という時間の中で癒してきたのではないだろうか。

親子双方へのアプローチ

子どもたちの「心のケア」の必要性が叫ばれる

けれども、親の生活の再建と切り離して考えられないケースも多い。

この夏、たしか八月十五日の事だったが、「ひろしまのピカ」を保育園の子どもたちに読んでいた時のこと。長田で震災により家が傾いてしまった三歳の女の子が口を開き、とめどもなく語り出した。おじいちゃんと近くの学校に逃げた事。家のまわりの家という家は燃えてしまった事、その子の家は鉄筋コンクリートだったので助かったが傾いてしまった事。余程恐ろしかった体験が「ひろしまのピカ」と重なったのであろう。読み進むにつれ、彼女もよどみなく自らの体験を語るので何度も読むのを中断せざるを得なかった。紅蓮の炎から逃げまどう母子の姿はまさにその子の体験であった。原爆が生み出した地獄絵図は、五十年を経てその小さな子の眼前に生きて顕われた。からだの中にたまった恐怖を一気に吐き出せたのか、しゃべり終えホッと息をついた様子が忘れられない。



▲救援物資が続々と届いた（'95，1，21）

四月にその子の家を訪れた時、巾五メートルぐらいの小さな三階建の家は、二階に入り坐っていると気分が悪くなる程傾いていた。ジャッキアップして

修理する費用は何千万円もかかるし、仮にそうしたとしても区画整理にかかっているので将来はビルは取り壊されるかも知れず途方にくれておられた。

それで、本格的解決はともかくとして、台所と居間の床のみを補正する床を新たに取付け急場を解決する事で大変喜んでもらった。親が途方にくれ不安であると子どももその不安に満たされていく。親子双方へのアプローチが不可欠である。その部屋にいる丈で気分の悪くなるような、至る処の壁が破壊されているマンションに住む親子はダブルローンに苦しんでいるのだろう。長く欠席が続く。

義援金を一番沢山もらった人でも全額で四十五万円！ 一体これでどうして生活の再建が可能だろうか。現行の災害救助法では、個人補償は出来ない。新しい制度の創出によって一刻も早く、再建不可能な人たを救ってほしいと切に切に望む次第である。

（ちびくろ保育園）



保育の実践研究について考える

榎田 正子

昨秋、日本保育学会の会報に「実践者の立場から現場研究を考える」という一文を書かせていただいた。自分たちの現場での研究のあり方を模索していた時で、日々の保育実践をこんな風に研究に取り上げて行くことができればという期待を四点挙げたものである。

その後ありがたいことに、それを読んでくださった大学の先生から、研究者としての貴重な御意見をいただくことができた。また、我が園の実践研究は、未だ手探り状態ながらも少しずつ方向を見出しつつある。このような状況にある今、実践者が取り組む現場研究のあり方について、もう一度考えてみたいと思う。

まず、実践者にとって実践研究とは、と考えてみたい。保育の現場では、まだまだ“研究”ということに対して何となく構えてしまう雰囲気がある。毎日の保育とは違うもの、かけ離れたもの、とっつきにくいもの、といった印象があるのかもしれない。しかし、実

実践者にとって保育実践は、それ自体研究的な要素から成る営みである。一人一人の子どもの思いを汲みとり状況を受けとめ、それに基づいて子どもと関わっていく。そして、それで良かったのか、もっと別のとらえ方、別の対応をしたら何が変わっていたか等、検討や試みをくり返し、それぞれの子どもが十分に自己を發揮して豊かな体験の中でふさわしい成長・発達が遂げられるように、子どもとの生活を創造していくのである。このような保育の流れとそこに生まれる問題意識、検討、工夫など、実践の営みそのものを保育研究として組み立てて行くとすれば、その研究は日々の保育活動と深く結びつき、より充実した保育を実現する方向で実践者を生き生きとさせるものになるのではないだろうか。一方、もしも実践者が日々の保育活動との接点をとらえにくい研究に取り組まざるを得ないとしたら、その状況は実践者に過大な負担感を抱かせ、保育に影響を及ぼすことにもなりかねない。実践者にとって、保育研究と保育実践の関連性はひとつの大きな要素であろう。

私共の現場では、研究のためのテーマを先に決めるのではなく、保育者がそれぞれの具体的な問題意識や悩みを持ち寄って話し合いを重ねることを重視し、保育者の必要感に根ざした保育研究が生まれることを期待している。

次に、保育の流れを実践研究として取り上げる際に、実践者自身の内面を有効な形で資料に生かすことの必要性を提案したい。

保育の日常にあっては、こうしたい、こうすることが良いだろうと思いつながら通



りに行かない場合がしばしばである。そうかと思うと、フツとした気づきから今までわからなかった子どもからのサインが受けとめられるようになったり、子どもとの間を隔てていたものが突然無くなったように感じ子どもと同じ側に立っている感覚を体験することもある。前者の場面は保育の中で生起する躊躇、葛藤、不自由感など実践者の揺れとも言うべき部分であり、後者は実践者の育ちとも言えるかもしれない。このような実践者の「揺れ」や「育ち」を丁寧に取り上げ、何が揺れの奥にあるのか、育ちをもたらしものは何なのかを検討することによって、時に保育実践を硬くしている「保育者のとらわれ」を探り、更にはとらわれからの脱出を助けることに役立つのではないだろうか。但し、ここで挙げている「揺れ」や「育ち」は極くあいまいな感覚であるから、実践者はそれを敢えて問題視して表現しようとする視点と勇気が要ることではある。しかし、実践者が自らの専門性を基盤としながら、自由感をもって子どもと関わるのが保育実践において非常に大切なことであると考え、また実践研究の今後を考える時、今ここで一步を踏み出したいと思う。

第三には、研究資料について考える。実践者が取り組む現場研究として考える立場からすると、前述の実践者の内面を含めた実践者自身の記録は欠かせないものである。従来は研究資料としての実践記録というと、客観性に強くこだわる傾向があった。今は、実践者が自らの視点で保育のありのままを研究資料として表現するにはどうしたらよいのか、固

定観念にとらわれない柔軟な姿勢で工夫する時であろう。

また、研究の視点にもよるが、実践場面の記録にとどまらず、保育の実践に大きく関与するものがある場合にはそれ等の記録も、併行的な資料として検討することになる。私共の園での取り組みから言えば、実践者自身の気づきや保育に対する検討は実際の保育場面でも見られるが、保育を支える目的で継続的に行っている保育の話しあい（保育カンファランス）の場でも多く見られるので、この話し合いの記録も重要な資料と考えている。

第四には研究における協力体制の重要性を指摘したい。すなわち、実践を理解した上で、当事者でない視点から保育場面を検討できる人と実践者との対等な協力体制は、広い視野で保育や研究の姿勢等について検討することが可能であり、現場研究にとって非常に望ましいものである。この点については、研究的立場にある方から、「実践を理解していること」、「対等であること」をいかに実現するかが大事であり、実践者と研究者の双方の立場の理解と歩み寄り、互いに反論や疑問やコメントを出すことが許されるような雰囲気作りが重要であるとの具体的な指摘をいただいた。研究者と保育者ばかりでなく、異なる立場の者が協同でひとつのことに取り組む場合、お互いがそれぞれの立場を尊重しつつ、同時に自らの立場が無意識のうちにつけてしまっているガードを開いて関わって初めて、お互いを生かした成果が生み出されるのであろう。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

四季の庭・四季の道

子どもと一緒にたのしむ

春まき草花二種 キンレンカとフウセンカズラ

浅山 英一

どんな高価な植物でもそれが子どもたちにとって
良い相手でなければ何の値打もありません。たねを
まいて毎日見まもり、のびていく生命の力を知らず
知らずの間に体得し、花が咲き実が成り、たねをと
りまた来る時期に心を寄せることができれば子ども
たちは幸せです。しかもその過程で共にあそぶこと
もできて、たのしく自然の恵みと不思議さを感じる
相手をもたせたいものです。

草花の種類も多く性質もいろいろですが、共にた
しめる、丈夫でおもしろい草花を選んでみました。
ときが経ていつのことか幼いころの想い出の一駒と
なればすばらしいしごとだと思えます。

キンレンカ

キンレンカの花は花びらが五枚集まってラッパの
ような形で、萼がくが合体して尖った蜜袋（距という）

になっているので、横から見ると西欧の騎士がかぶっていたヘルメットのように見えます。葉はハスの葉に似た形で円形の盾のようです。

ヘルメットと盾をもっていれば戦に勝った兵士というわけでキンレンカの学名はトロローペールム (Tropeolum) とつけられています。これはギリシャ語のトロパイオン (tropaiōn) で戦勝者に

キンレンカ *Tropeolum majus*



与えられるトロフィーのことです。

日本の子どもたちには騎士の姿はあまり馴染がないようですが、ヨーロッパの子どもたちは小さなときから騎士の話をよく聞いていますから馴染深いサムライなのです。

花を一輪とって人指し指か中指にかぶせ指の腹に目鼻をつけるとサムライができます。指を曲げたり伸ばしたりすれば友だちどうして話し合いますことができます。



水玉あそび キンレンカの葉に水滴を落してみると
コロコロと玉になってころがりまわります。

これは水の表面張力によって球状となるのであつて、ある程度の大きさになると重さが加わって扁球形となつてころがり落ちます。

幾人かの子どもたちに葉を一枚ずつもたせて一定の水を落してもたせたら、用意ドンとかけ声をかけて五メートルほど離れた決勝点に出发させます。

水滴をこぼさないようにゴールラインした子どもに、一・二・三等と優勝を争わせるゲームは如何でしょう。水滴がこぼれてしまえば一等でも失格です。

この水玉あそびはたいへん慎重に水滴をこぼさないように遅れた子が優勝します。

葉で日光写真あそび キンレンカの葉は日光にあたると活発な同化作用を営みます。

子どもたちにアルミペーパーを与えて思い思いの形の切り抜きをつくらせて朝のうちに一枚の葉に貼らせます。

日中はそのまま、夕方にその葉を集めて各自にアルミペーパーを剥がさせて回収します。見たところ何の変りもない緑色の葉ですから誰のものか判りませんが、これを集めて平鍋に入れてアルコールで煮沸したものをとり出します。緑だった葉はアルコールで葉緑素が無くなって黄色くなつてしまします。

さて、この黄色くなった葉にヨードチンキを浸し

てみると、切り抜いたアルミペーパーの部分は変らない黄色ですがその他の部分は黒変して誰がどの切り抜きをしたかがよく判ります。

これはキンレンカの葉が日光にあたった部分は澱粉ができていたのでヨード反応があらわれるからです。

葉をアルコールで煮沸するのは危険ですから子どもたちには絶対やらせないで指導の先生がたにやっていたことを願います。

キンレンカの育てかた

キンレンカは南米のチリやペルー、コロンビアなどの高山地方原産の多年草ですから日本の夏の暑さには弱く枯れることもしばしばです。また厳しい寒さにも弱く凍ったら枯れてしまいます。

たねまきは四月中頃、発芽は一〇度C以上です。日当たりと水はけのよい場所をよく育ちます。鉢作りやプランターに一〇センチおきに二粒ずつたねをま



き、そのまま育てますが、用土は微塵をふるいすけた粗いものがよく細かい土は不首尾です。子どもたちには皮つきのたねを置いたら人指し指第一関節まで押し込ませます。

発芽後はよく日光にあて、水やりを控えめにすれば花も早く咲くようになります。水やりが多いと茎や葉はよく伸びますが花つきが遅くなります。

市販のたねは花が混合色のものが多く黄、紅、オ

レンジなどの花が咲きます。昔はつる性の種類が多く二、三メートルにもびましたから、垣根に植えたり支柱を立てて纏わらせたりしましたが、今の品種は殆どが矮性種です。

一般には五月末から花が咲きはじめますが、梅雨あけに暑さが強くなると成育は鈍ります。信州や東北地方など夜が冷える地方では夏も咲きつづけます。

温室やフレームがあれば早まきもでき、三月下旬から咲きはじめます。

たねとりはなるべく媒助した方がよくとれ、果実が熟して手でさわってポロリと落ちるようでしたらそのまま集めて乾かして貯蔵しておきます。

お肉料理のツマに

キンレンカの若葉や茎を口にくわえて噛んでみるとなんとピリリとワサビの辛さがします。子どもたちは決して喜びませんが、そのまま口にいれているう

ちに甘くなってきました。ナスチウムという名は、西洋カラシのことですが、ヨーロッパの人たちはこれをお肉料理のツマとして口なおしに利用しています。

花も葉も無毒ですからお料理に添えてみるのも一興です。

フウセンカズラ

風船のような実が成る三メートルほどにのびる性の多年草で、世界各国の熱帯地方に育つムクロジ科の雑草です。垣根にもよし、軒先から紐を吊し張ってまとわらせてもおもしろいので子どもたちにはぜひ取扱わせたいものの一つです。

鉢植えもできますが支柱が必要です。

育てかた

たねまきは四月、水はけと日当りのよい場所を選んで三〇〜四〇センチおきに一、二粒じかまきしま



す。発芽して茎がのびはじめると間もなく細長い花柄が出ますがその基部は一对の巻ひげとなり他の物にからみついてのぼります。

花柄は枝分れして小さな白い花をつけますが見る価値はありません。しかしすぐに果実となってふくらみ吊り下るようになります。

果実はい三稜のある径二・五センチほどの扁球形で、中はカラッポですから指でつぶせばボンと音をたてて破れます。

これが面白いので子どもたちは熟さないうちに果実をつぶしたがりますがこれは厳禁です。

たねが熟せば緑色だった風船は茶色になって枯れますがたねはそれで黒く熟しています。

たねでつくる三匹猿 フウセンカズラのたねは径四ミリでいど丸くてコロコロしていますが背面は真黒、腹は白くハート形をしています。一果に三個のたねができています。

手芸用のモールを用意して錐で孔をあけたところにモールを押しこみ、適宜に折り曲げて足と手をつくりまわす。ボールペンでたねの白い部分に目鼻と額のしわを一、二本つけるとお猿そっくりの形になります。

この際一つは目をかくしている見ザル、一つは耳

を塞いだ聞かザル、一つは口を手でふさいでいる言
わザルというわけで仲よく台紙に貼りつけると三匹
ザルが出来上がります。

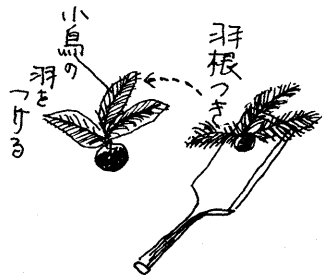


モールで手足をつけた三匹ザル
尻尾をつければ坐ります

羽根つきの羽 フウセンカズラはムクロジ科の植物
です。ムクロジのたねは黒くて丸く羽子板で叩かれ

る羽根の玉にさ
れるものです。

フウセンカズラ
のたねは小さく
て吹けば跳びそ
うですが、それ
でもカナリヤか
ブンチョウなど
小鳥の抜けた小
さな羽を三〜五
枚さしこめば小人の羽根つきには間に合いそう
です。



フウセンカズラは英名でバルーン・バインとも
ハート・ピーとも呼ばれます。風船のような実が成
るつる草の意味でもあり、ハート型の豆とはたねの
ことを言うのを西欧の子どもたちはよく知っていま
す。

(園芸研究家)

お母さんのぬくもりから

離れて初めての集団生活へ

小島 直美

木々が芽ぶき、桜の花が咲く四月、多くの人が学校へ、社会へと出発の時を迎えます。小さな子どもたちにも初めての集団生活へ第一歩を踏み出す時が来ました。

保育園、幼稚園は、それまで家で母親に守られてのびのびふるまっていた子どもたちにとって、楽し

みである一方とても大変な事の多い所なのでしよう。入園、その後の園生活にまつわる電話相談は乳幼児期の相談のかなりの部分を占めています。

幼稚園に入れてもだいじょうぶか？

三年保育に入れようかどうかの悩みは夏頃に多く

聞かれます。まだオムツがとれない、甘えん坊ですぐ泣く、下の子がうまれたばかり、母親はもう一年手元におきたいが「二年保育じゃはみれ（仲間はずれ）にされるよ」と近所の母親に言われて迷ってしまう。その子その子の状況によって三年保育ならこんな良い面があるし、一方こんなマイナス面も考えられるね」と迷う母親の気持ちをもう一度きちんと整理していくと、この子にとってどうしてあげた方がいいのか、という視点が見えてきます。

二月、三月になると入園を控えての心配が寄せられます。すぐ友だちに乱暴するのが気になる、逆に内弁慶でおもちゃなどいつも譲ってしまう、と具体的な不安が聞かれます。お母さんの手から離れるのでいろいろな心配よね」と母親の気持ちを受けとめ、「これからは子ども自身がいろいろな経験をする中で人とのつきあい方をしっかり学んでいけるはず。その手伝いは幼稚園の先生がしてくださるから」と話します。幼稚園の先生に対して緊張している母親

が、安心できて子どもを送り出せるといいと思いますから。



新しい生活で夜泣きや吃音が……

そしていよいよ入園。新しい生活であっという間の一か月なのでしようか。四月は相談の電話は少なく、五月の連休が明けた頃から入園後のものもろの相談がはいります。特に三年保育やさらにその前の準備保育（週に二日ぐらいが多いようですが）で

は、夜泣きをするようになった、甘えるようになった、吃音がでた、頻尿、夜尿、と新しい環境で精一杯頑張ってきた子どもたちの反応が訴えられます。ほとんどの母親はとまどいなながらも無理ないなああと理解し、慣れるまでゆったり支えてあげたいと気づきを語ってくれます。お友だちにいじわるされる、いじめられっ子になるのではないか、乱暴な子がいてよくぶたれる、「ぶたれたらぶちかえしていいの、ママ?」と問われて、今まで乱暴はダメと育ててきたのにどうしたらいいか、と相談された方もいました。

ママと一緒にいたい

三歳・三年保育に入園した女兒

入園当初は喜んで通園バスで通園していたのに、ゴールデンウィークを過ぎたら行きたくないとぐずりだした。ママと一緒にいたいから、と言う。母親は就業していて、それまでも祖母に預けられてママ

行っってらっしゃいと言えていたのに。

幼稚園と相談して朝は母親が歩いて送ることにした。幼稚園に近づくと「抱っこー」と甘え、それでも幼稚園に着けば先生に抱かれて離れられる。

ひとりっ子で祖父母宅には曾祖母、叔母もいておとなばかりの中で育ち、近所に同年齢の子もいなくて子ども同士で遊んだ経験もほとんどなかった。

幼稚園でも子どもたちの輪の中に入れていない様子だし、先日参観日に見ていたら皆のお遊戯の中にも入らずひとり離れて見ていた。先生にくっついていることが多い。

この相談のように地域によっては子どもが少なく、公園に行っても同年齢の子どもがいないので子ども同士遊んだ経験が少ないまま入園する子どもも多いのでしょうか。さらにこの母親にいろいろ聞いてみると、母親が働いていたため育児の中心になるおとながはっきりしないまま大勢のおとなに、かま

わかれて「きたとのこと。初めての子ども集団の中で緊張にさらされて帰ってきてても、しっかりした心の寄りどころがなかったのかもしれない。今になってと母親は言っていました。ママと一緒にいたい」という気持を受けとめてあげて、まず子どもが本心に安心できる場所を確保してあげ、そこから外に出る力を育めるといいと理解してくれました。そして外での子どもたちとのつきあいも、焦らずだんだんに慣れていけるように、この一年は練習のつもりで、と話しあいました。

あした、幼稚園あるの？

やはり三歳の男の子

三年保育入園後、四月は夜うなされて泣いていた。朝はやく目覚めて眠れない状態、お弁当も初めの十日はまったく手がつけられなかった。トイレにも行けず朝八時から帰宅する三時までずっとがまんしてきてしまう。一週間前から毎晩おねしょをす

る。帰ってから寝るまで「あした、幼稚園あるの？」と聞く。母親としては休ませたらこのまま行かれなくなるのではと心配。

友だち遊びの経験も少なく、小さい子集団に圧倒され緊張している。いじめられたり蹴られたりすると言う。二十二人のクラスに先生一人で目が届かないことも多いのか、おやつは他の子にとられちゃうと言う。

入園して一か月半、困りきった母親の気持を聴いているうちに、さらにいろいろなことがわかってきました。母親自身が神経質で、何でも手をかけて「きちんと」「きれいに」育ててきてしまった。汚れるのが嫌で食事もひとりで食べさせずに母親が食べさせてきていた。実は自分も幼稚園の時お弁当を食べられなくて母親に付いてきてもらっていた「問題児」だったと語る。六か月前には第二子出産。その四か月後、母親の母が急死。精神的にまいって

る。この子にもこれまで以上に「お兄ちゃん
しよ」と叱ることも多かった。幼稚園のことでグズ
グズ言う、「じゃあやめちゃえば」と思わずひどい
ことを言ってしまう、そうすると「幼稚園に行くか
らママ叱らないで」と子どもが言う。この子のつら
い気持をわかってあげられなかった。忙しくて手の
かけられない下の子のびのびした様子を見ている
と、この子にはこういうふう自由にさせてあげら
れなかったなあと思う。

そんな母親の気づきを支えながら話していくと、
自分が責められるような気がして幼稚園側に相談で
きずにいたが、今、この子を共に育ててもらえる人
と考えて先生に相談してみる、と今後への覚悟が語
られてきました。「又困ったら聞いてくださいね」と
言っていて終わったこのお母さんからは、その後電話
がありません。きつと幼稚園の理解に支えられて楽
しく園生活を過ごせるようになったと信じていま
す。



お弁当、はやく食べていっばい遊んだよ

秋になって急にお弁当が食べられなくなって吐い
てしまう、との相談もありました。お弁当は残さず
食べる約束、食べ終わった順に遊んでもいい約束の
ある幼稚園で、食の細いこの子には負担が積もって

いたのかもしれませんが。やはり先生と相談すること
をすすめ、しばらくは果物だけのお弁当の許可をい
ただいて、「一番に食べ終わっていっぱい遊べた
よ」のうれしそうな報告があった後、お母さんもお
星さまのサンドウィッチなど工夫し、遅ればせなが
らだんだんに楽しいお弁当時間が過ごせるようにな
りました。

このお母さんもお姉ちゃんの子育てで悩んだ時期
があり、又この子も失敗したら、と意気込みすぎた
子育てをふりかえることができました。三回に継続
しての電話相談の中でまず母親が受けとめられて励
まされていくことで子どもへのゆとりができ、子ど
もの気持に添って幼稚園側と話しあっていけること
ができました。

問題の解決にむけての転園

A子ちゃん、五歳

年中の二月に登園渋りの相談。もともと近所の同

年齢の友だちにいじめられることが多かった。口で
いろいろ言われたり、仲間はずれにされたり、自転
車のベルのカバーを盗られたり。母親が相手の子や
親にそれらのことを話すと、ただ口で謝まるだけの
母親や「うちの子はそんなことしない、誰かに乗せ
られてしたのかも」と認めない母親との間で、か
えて子どもがケンカに親がでて、と相談してきた
母親の方が気まずい立場になってしまった。幼稚園
でも先生の見えていない所でいろいろあったらしく、
二学期から時々頭が痛いと思む。

一回目の相談では母親の感じている息づまった状
況を理解し、では今何ができるのかを話しあうと、
A子ちゃんの気持の支えになること、幼稚園の先生
に冷静に話すこと、相手の親たちには距離をとること、
他の地域に母子共友たちを作ること、相手の子
たちにもあたたかいまなざしを持って、と母親自ら
課題を整理した。

約二週間後二回目の相談。その後登園した日も

あったが休みがち。幼稚園には理由も書いて休ませたが、四日ぶりにやっと何とか行けた時に「三日も休んじゃってエー」と言われてショックだった。幼稚園側は相手の親に「子どもはそういうことを経験しながら大きくなるのに」と話したらしく、相手の親たちからは「あてつけがましく休んで」と言われてしまう。

たまたま他の幼稚園で新入園児の体験入園をしているとの話を聞き、事情を話してみたら是非とのことで行かせてみた。みちがえる程元気になり明るく楽しく通園している。近所で行っている人に話を聞くと園長先生のお話の内容、日々の先生の子どもへの対応の仕方、月一回の母の会のきめ細かさなど今までの幼稚園とのあまりの違いに驚いている。思いきって転園しようかどうか迷っている。

木の芽がふくらむのに寒さも必要だけど共に耐えたり支えたりしたりの環境として新しい幼稚園を望んでいると母親の気持も決まりかけていること、A子ちゃ

んも今は知っている友だちのいるクラスでの体験入園だけど四月からは新しいお友だちのクラスになることも納得していること、などから転園が適切な印象を受けた。

そして五月に三回目の電話。これは相談というより報告で、新しい幼稚園での生き生きとした生活が語られる。A子ちゃんだけ知らない友だちの中に放りこむのではなく、母親も新しいスタートを、と母の会の委員をすすんで引きうけた。きのうは遠足で



母子共あたたかい雰囲気の中ですばらしい一日だった。

子どもの成長を皆で協力して支えたい

前述のいくつかの相談と違ってこの相談は残念ながら幼稚園側と母親が共に問題の解決にあたれず、転園という不安をも抱えた状況で解決の糸口が得られませんでした。実は相談の多くは幼稚園に対して母親が何らかのマイナス感情を持っています。幼稚園と一緒に何らかの問題に取りくめていければ電話相談は必要ないわけですね。

確かに、幼稚園から泣いてでもなんでもともかく連れてきてくださいと言われ、母親が「まるで私が虐待でもしているのかと自分で思う程」の状態で登園を嫌がる子どもを無理やり通園バスに押しこむ話を聞くとこちらも胸が痛みます。又、パジャマのままでも連れてきてくださいと言われたが自分の感情としてどうしても納得できないという母親の気持ち

わかります。まず混乱したり疲れきっている母親を辛い、感情面をしっかりと受けとめます。子どもの気持ちもわかるし幼稚園からは母親が責められているように感じてしまうし、もうどうしていいかわからないという困り感を理解します。それから状況をもう一度整理していくと、幼稚園とどこにポイントをあてて話しあっているかが見えてきます。第三者的立場で幼稚園と母親との橋渡しができます。困っていた母親が自らの力で解決に向けて幼稚園と話していけることを援助すると言った方が適切かもしれません。

家庭の中で母親に守られて育ってきた子どもが初めて経験する集団生活、一見困ったことに思われる出来事は成長していく子どもの大切な時と考えて、皆で協力しあって乗り越えて行きたいものです。

(神奈川県横須賀児童相談所電話相談員)

選ぶのは、子ども

田中 三保子

子どもたちが毎日幼稚園で生活している様子は、子どもによりいろいろである。一緒に生活し、世話を焼いたり要求に応えたりしていると、保育者には一人一人の気持ちや人となりが見えてくる。そしてそれぞれの子どもについて、こうあってほしい、あああってほしいという、保育者としての願いともいうべき気持ちを抱く。その願いを子どもたちにどう伝えてい

たらよいのだろうか。

ぼくも、わたしも、つかいたい

三歳児の十月半ばのことである。

A子が庭遊び用のままごと道具とおぼしきものを抱えて、園庭を横切っていくのが保育室から見えた。多分あれは年中組のものだ。いつもなら（置きっ放しをそのまま）借りてその場で

遊んでくるのにどうしたのだろう、と思いながら、園庭に出てみる。A子は、砂場の近く、隣の三歳児の部屋の出入り口の斜め前の場所に道具を並べているところだった。そばにいくと、私の顔も見ずに「B子ちゃんと遊びたい」と言う。なるほど、B子と遊びたかったからここのま道具を運んできたのね、と私は納得し、「それで。B子ちゃんはお部屋よ」と答える。A子はそれには答えず、「B子ちゃんと遊びたい」を繰り返す。始めた場所があまり適切でないような気がして言葉をかけようと思ったが、A子なりの考えがあつたのかもしれないと思ひなおし、とりあえずB子を呼びに行く。部屋に戻りB子に声をかけていると、「ぎゃあー」というA子の泣き声が聞こえてきた。行ってみると、A子は砂利の上に乗ったと座りこんで泣いている。やはり砂場に近すぎたようだ。砂場で

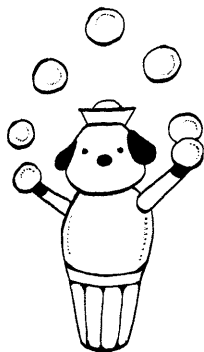
遊んでいたC夫が道具を取ろうとしたらしい。C夫はA子に背中を向け、顔はこちらをうかがうようにして砂場のむこうはしに立っていた。年少組には庭遊び用のままごと道具はないので、他の子どもたちに魅力的にみえるのは当然である。それにしても、いつもながらC夫はめざといし素早い。欲しいと思つたら手が出てくる。A子の借りてきたのは、ガスレンジ、お鍋、お皿、スプーンが一こずつとカップ二こである。C夫に貸すだけの余裕はありそうもないので、今は我慢してもらうしかない。何を言われるのだろうかという風情のC夫の背に向かつて、「A子ちゃんね、使いたかったから今借りてきたとこなの。もう少し遊びたいから持っていかないでね」と言ってみる。そして付け加えた。「もう少ししたら『貸して』っていつてみて」。聞こえたのかどうか、A子をなぐさめ

ているあいだにC夫はもうどこかに言ってしまったようだった。

この場所は砂場にも隣の組にも近すぎてあまりにも刺激的だし、座るにしても砂利が痛そうなので、引越しを提案してみることにした。ごさを持ってきて、「あっちにおうちを作りましょうか」と促すと、A子はすんなりと道具を抱えてついてきた。大声で「やだー」と拒否されることが多いのに、今回は神妙である。そこへB子がやってきて、二人でのままごとが始まる。途端に、B子と一緒に部屋から出てきたD子が寄ってくる。続いてE子、F夫もやってきた。今度は自分の組に近すぎたかもしれない、でもあまり遠いのも目立ちにくいには違いないけれども思っているうちに、A子が「ぎゃあー」と泣き出した。まわりの子どもたちも遊びたくて、それぞれままごと道具に手を

出している。A子は道具を抱えこんで「だめー」と泣き叫び、相手の手を払いのけようとする。

B子にはA子の泣き声がどう響いているのだろうか。A子の向こう隣で黙々とカップにス



プーンで砂利のごちそうを作っている。いつもならどうしたのと寄ってくるのに、ごちそう作り熱中してしまつたようである。D子はB子ならやらせてもらえろと思つたのかもしれない、B子に近づき少しずつ手を出して、結局一緒にやり始めた。B子、D子の二人はどうやら共存できそうである。

E子、F夫は、泣き声にもめげず、A子のすぐ前でままごと道具をじつと見つめ続けている。そして、口々にやりたいと私に訴えてきた。目の前でおもしろそうなことが展開しているのだから、実にもっともなことである。しかしA子にしてみれば、B子と二人だけでこのままごとをしたかつたのだから。しかもやっと落ち着いて始めたばかりなのである。

私はそこに座りこんでA子を膝にのせた。ともかくA子の気持ちを落ち着かせたかつた。そ

の一方で、E子、F夫にも私なりの同意の意志表示をしたい。「A子ちゃんはね、これでごはん作りたかつたの。でも今始めたばかりなの。もう少しやりたいの」。E子もF夫も手は出さなくなつたが、目はお鍋に釘づけである。そして繰り返して言う。「E子（F夫）もやりたい」。

「A子ちゃん、E子ちゃんもF夫くんもやってみたいみたいよ」。膝の上のA子に呟くように言うと、途端にまた、「だめー」と泣き叫ばれてしまった。A子が落ち着くまでにはまだしばらくかかりそうである。E子たちはA子の気持ちまでは理解できないであろうから、私がこの場を離れたらまた取り合いが始まるだろう。砂場からも部屋からも何度も呼ばれているけれども、しばらくはこのまま様子を見るしかない。

私はA子も、E子、F夫もそれぞれに存分に

遊びたいだろうになあと思いながら、有効な働きかけもみつからないままに、双方の気持ちを言葉にしてみたりなどして、しばらく時を過ぎた。そうするうちにA子もかなり落ち着いてきたようだし、砂場でひたすら私を待っているC夫にぜひとも応えたくて、私はA子をそっと膝からおろしその場を離れた。気になってたびたび振り返って様子を見ると、E子たちは我慢してA子の遊ぶのを見ているようであった。

私は少し安心してC夫の相手をしていたが、はっとして振り向くと、予想に反してそこには穏やかな光景が繰り広げられていた。向こうで二人、こちらで三人が向かい合い、それぞれ一心に何かを作っている。わずかのあいだにどう折り合いをつけたのだろうか。ほんの少しのままごと道具をどう分け合ったのだろうか。

近づいてみると、A子はお鍋一つで遊んでい

た。B子と一緒にの時は道具を全部使っていたはずである。しかし今は、目の前でE子、F夫がそれぞれに何か作っているのを全く気にかけていない様子で、自分の作業に没頭している。あれほど拒否していたのにA子は二人を受け入れたのだ、とこの時私は確信した。

保育者の願いを伝える

C夫はこの事例のような行動をとることが多い。保育者としては、もう少し相手に対しても目を向けられるようになることを願う。やりたいう気持ちはわかるけれど、相手も使って遊んでいるのである。そのことをどう伝えたらわかってもらえるのだろうか。有無を言わず持つていったり叩いたりをいけないと止めるだけでなく、C夫の思いが実現できそうな別の方法を示していくことも必要なのではあるまいか。あの

時は、A子にたとえ「貸して」と言ったとしても、実際には無理かもしれないとは思いつつも、私としては、C夫が「貸してもらおう」方向で考えるようになってほしいと願ひ、言つてみたのである。

A子はしたいこと、したくないことを頑として通すことが多かった。氣に入つた人形を抱えこみ、決して貸さない。遅く登園し、D子（のことが多い）が使っていると無理矢理取ろうとする。こういう時、D子も負けてはいない。絶対に放そうとしない。A子は「ぎゃあー」と大声で泣き、「A子のー」とわめきたてる。たいていは、D子が黙つて人形をA子の目の前に差しだして一応解決するのだが、それまで泣き続ける。A子の独特の甲高い声が、その間じゅう部屋に響きわたる。

A子がその人形を頼りにして、どうして

も抱いていたいの痛いはよくわかる。でも、D子だつてそうしたかつたにちがいない。いつもA子に先を越されて我慢していたのだから。私はどうしたらよいのだろうか。

A子の強引さを何とか引き止め、なぐさめてみたり、D子の氣持ちを言葉にしてみたり、状況の説明をしてみたり、抱きかかえてみたり、いろいろやってみるがなかなか芳しい結果にはならない。D子は多分そんな様子を見ていて、貸してあげようと思うのだから。A子の方は、人形が手に入ればそれでいいとばかりに、けろつとして遊び始める。D子をもっと遊んでほしいのに貸してくれたのであろうに。「D子ちゃん、ありがとう。使いたいのに貸してくださいだね」。D子の氣持ちに感謝しつつ、A子にもわかつてもらいたくて私は言ってみる。

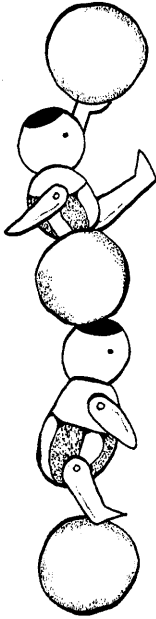
選ぶのは、子ども

子どもたちは、それまで育ってきた環境から身につけたものの見方、行動の仕方そのままに入園してくる。環境は子どもによって異なるので、物の見方、行動の仕方それぞれである。幼稚園で生活するうちに、子どもたちは、思いがけない反応に出会ったり今までのやり方では通じないなどの経験を通して、自分とは違う相手の存在に気づくようになる。自分と違うとい

うことは、興味を引きつけられることでもあるが、ときには脅威ともなる。

保育者としては、子どもたちが違いを受け入れ、相手を理解し、関わり合うことを楽しめる人になってほしいと願う。子ども同士が、思いやり方の違いからぶつかったりしても、いやな思いをするのではなく、相手を知りわかりあえる機会にできるような働きかけを工夫していきたい。

子どもはたいがい目の前のことしか見ていな



い。しかも、自分の欲求とのからみでその場をみていることが多いので、まわりの様子などはあまり目に入っていない。けれども、保育者にはそれぞれの子どもの気持ちや経緯などがある程度みえている。子どもより大きな視点でその状況をとらえることができ、その場のより良い方向転換を指し示すことができる。

状況がよくわかり、解決方法が見えていると、保育者としては最善の方向へ事態をもっていきたいとなる。子どもに指示したりして、知らず知らずのうちに子どもをひっぱろうとしてしまいやすい。子どもを一定の方向に導くことが一番良いと思われるときもある。しかし、行動するのは子ども自身である。子どもが自分で選ぶ過程を大切にしたいと私は思う。子どもなりにいろいろな考えられるように、保育者の立場からの考えは選択肢として示し、最終決定は

子どもに任せたいと思う。

最初の事例においても、C夫は、思わず手を出してしまったものの以前のようにばつと逃げ出さなかった。彼なりに思うところがあつたのだろう。その場にとどまることを自ら選択している。また、A子は自分の考えで共存の道を選んだ。そこに至るまでには、その後述べたようなことが繰り返され、かなりの時間を必要とした。しかし、時間がかかろうとも、子どもが自分で選んだということはそのこと自体が意味のあることなのだと思う。子どもが納得して選んだことはその子のもとなり、その子自身を変えていく。子どもが自分で選択し、自分を変えていく力を私は信じたい。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

ある日の育児日記から

(65)

佐藤 和代

圭の卒園文集が届きました。アルバムを兼ねた文集で、ひとりひとりの写真と、六年間の園生活の写真、こどもの絵、先生からのメッセージ、親からのメッセージなどがはいったものです。最近我が家では、これがみんなの愛読書。

圭のページだけでなく、ほかの子のページも本当に楽しい。だって、赤ちゃんのときからずっと一緒に仲間です。あ、あのお母さんこんなこと書いてる、あの子はこの頃こんな顔してたわね、と、何度読んでも飽きないのです。

なれる場なんて、保育園以外なかつたな。職業も環境も本当にバラエティ豊かだったし、みんな小さい子をかかえて働いている立場ですから、困ったときは子どもを預けたい、相談しあい、たまには宴会もして、残念ながら同じ小学校へいく子はいないので、圭はいつか保育園仲間を忘れてしまうかな。この六年で友達を得たのは、圭より私の方かもしれない。子どもがいなければ、とてもこんな親密なつきあいはできなかつた人ばかり。圭と保育園に感謝です。だいたい家の中がぐしょぐしょでも「掃除するひよまなかつた、ごめん！」ですませられる相手なんて保育園仲間くらいですもん。



東欧の子どもたちと幼児教育(1)

ブルガリアの保育の現状と子どもたち

入江 礼子

はじめに

昨年の夏のOMEP世界大会で、東欧ブルガリアからみえたイワン・ディミトロフ教授(ソフィア大学)が、ブルガリアの保育事情について緊急報告をされました。ここではディミトロフ教授の論文や、その後にご本人から伺ったお話をもとにブルガリアの保育の現状並びに子どもたちの生活の一端をご紹介します。

介していきたいと思えます。

ブルガリア社会の現状

ヨーロッパ大陸の南東に位置しているブルガリア共和国。ルーマニア、ギリシャ、トルコ、ユーゴスラビアと国境を接し、面積は日本の三分の一弱、人口は八九八万人(一九九二年現在)を数えています。日本と大きく違う点は、その人口構成と言語の

多様さにあります。他のヨーロッパ諸国同様、ブルガリアも多民族国家で、ブルガリア人のほかに、トルコ人、ロマ（ジプシー）、ユダヤ人、アルメニア人、ギリシア人、ルーマニア人、タタール人などが住んでいます。公用語はスラブ系のブルガリア語でキリル文字を使用しています。しかしブルガリア語が母国語ではない国民には、憲法によってブルガリア語と並んで母国語を学習する権利が保証されています。

第二次世界大戦以後、ずっと社会主義の道を行ってきたブルガリアでしたが、一九八九年に東西を隔っていたベルリンの壁が崩壊してからは、他の東欧諸国同様、東欧改革の嵐の中に投げ込まれました。経済体制も統制経済から市場経済へと移行しつつあります。けれどもそのための経済的混乱が原因で、多くの失業者を出したり、人口の海外流出をまねいています。

一方教育制度も経済体制と同じく、一九八九年以

表 1990年の保育施設の形態

保育施設の形態	施設数	幼児数	1クラスの平均幼児数	教師数
全日保育	3091	207405	22	19347
全日保育と夜間保育	567	69473	22	6146
半日保育	891	24717	19	1287
療養保育	17	1170	17	140
特別保育	13	785	9	232
季節保育	9	215	17	20

(出典 中央統計局 子どものための保育施設 1991年)

降混乱し、現在もまだ抜本的な制度改革はなされていません。そのような状況のなか、教育関係者が、いろいろな提言を行っています。ディミトロフ教授もそのような提言をされている一人です。

ブルガリアの保育の現状

ここでは、ディミトロフ教授が O M E P の大会で発表された「ブルガリアの就学前教育」という論文を土台にしなが、現在の保育事情をみていくことにします。

一八八三年にはじまったブルガリアのプレスクール（日本の幼稚園、保育園にあたる施設）には現在三、四歳の幼児の四分の三が通園しています。もっとも一般的なプレスクールの形態は、全日保育（月曜日から金曜日まで、朝七時から夜七時までの保育をする）で約六七%を占めています。そのほかに半日保育が約二十%、全日保育と夜間保育を併せた形態をもつものが約十二%となっています。このほか

に特別な手助けを必要とする子どものための寄宿制のプレスクールを国が運営しています（前ページの表参照）。

次に教師の層ですが、年齢的には三十〜三十九歳が約四十二%、四十〜五十五歳が約四十二%となっています。教師のうち約二十%は大学卒で、約七十六%は三年間の教育の専門学校を終了しています。幼児教育が大学の科目となったのは、ここ十年間のことです。ほかの段階の教育に比べて軽んじられている感はありません。若い保育者が少ないのも悩みの種だったようですが、最近では、わずかずつずつが増えてきています。

プレスクールの管理運営に関しては、一九八九年以前は国がすべてを統制していました。今でもまだこの傾向は続いています。この国では八時間から十二時間という長時間保育が大勢を占めているのですが（表参照）、その大半はこの決められた日課によって進められていきます。

ディミトロフ教授の提言

現在日本では、働く女性の育児支援ということ
で、長時間保育も含めた保育所の在り方が再検討さ
れています。一方ブルガリアでは、約五十年間にわ
たって社会主義国家だったこともあり、プレスクー
ルでは長時間保育が大勢を占めています。これは女
性も含めた労働力確保という国の方針にそった結果
として当然の在り方といえます。育児休業に関して
も、両親のうちどちらかが有給で二年間取れるこ
とになっています。さらに、無給ではありませんが、
もう一年間の延長が認められています。

働く女性にとっては、恵まれすぎているようにみ
えるこの育児環境ですが、ディミトロフ教授はここ
で辛口の提言をされています。

まず第一に、幼児にとって一日のうち八、十二時
間も母親をはじめとする家族から分離されること
は、子どもの肉体的、精神的な限度を超えていると

訴えています。長時間保育は、国の労働力を確保す
るといふ要求にかなうことではあっても、決して子
どもやその家族の要求にかなうものではないとい
うのです。教授は、長時間保育あるいは夜間保育は、
片親や学生の母親のために残しておく必要はある
が、それが主流になるべきではないと主張していま
す。第二に、プレスクールでの日課をもっとも
子どもの自然な要求や個々の子どもたちにあつたも
のに変えていく必要があると述べています。幼児の
自然な活動である「遊び」をいままでの訓練と入れ
替え、子どもたちの実際の経験から離れた課題を、
もっと日常のありのままの生活に近づける必要を説
いています。また幼児期が人生の上で、心理的にも
肉体的にも柔軟で力動的な特別な時期であることを
よく認識して考えるべきだと述べています。

これらのことを実現するためにプレスクールで
は、―自由遊びと、保育者、仲間の子どもたちとの
人間的な相互作用―を大切に活動を中心にした

てくるべきだと提言しています。

ディミトロフ教授の提言から考える

今の日本の幼児教育の状況から考えると、教授の提言にはことさら新しさが感じられないかもしれないかもしれません。しかしながら私たちがここで忘れてはならないことは、ブルガリアの現状の上にこの提言がなされていることです。どこの国も、その国の歴史的、文化的、社会的、経済的なさまざまな状況の上になつて、幼児の教育も行われています。一九八九年以降のブルガリアは、それまでの社会主義的な価値から、自由主義的な価値への転換期にあります。それは、第二次世界大戦直後の日本の混乱にも匹敵します。物不足も深刻です。たとえば、プレスクールなどでいうと、子どもたちが描画に使う画用紙などの紙類も非常に不足しています。

ところで、働く女性が働きやすいようにというよりは、国の労働力確保という大目標の上になつて行

われていた長時間保育。ここには、「子どもにとつて、そして母親や家族にとつて、この長時間保育が幸せなことなのか」と問う視点はありませんでした。前にも述べたように、教授は今そこを問題としてとりあげています。ひるがえって、現在の日本の長時間保育に対する考え方の流れをみていくと、働く女性を支援するという視点でのみ語られることが多すぎるように感じられます。もし、日本で長時間保育が現在の状況からさけて通れない道であるとすれば、そこで一日の大半を過ごす幼児の生活が、かけがえのない幼児期を過ごすのにふさわしいものになるよう、その内容を充実させることを私たちは真剣に考えていく必要があります。さらにいえば、このことと平行して、家族でゆったりとした時間を過ごせるような職業形態を模索していく必要があります。長時間保育を増やすことだけでは、解決にはならないことを忘れてはならないと思います。

ブルガリアの子どもたちの遊び

さて、現在ブルガリアの幼児たちはどんなことを楽しみ、どんな遊びをしているのでしょうか。ここではディミトロフ教授ご夫妻の協力を得て入手した資料から、ご紹介したいと思います。

まず、幼稚園でよく遊ばれるのは、ごっこ遊びです。家族ごっこ、学校ごっこ、幼稚園ごっこ、おみせやさんごっこ、病院ごっこなど子どもたちのまわりにあるものは、なんでもごっこ遊びの対象となります。その折、積み木などを使っていろいろな建物を作ります。



▲つりゲームを楽しむ

次に好まれているものは、サッカー、バスケットボール、テニス、バレーボール、サイクリングなど

のスポーツです。また、ブルガリアの子どもたちにとって水彩絵の具やパステルなどを使って絵をかくのも楽しみのひとつです。

それからもう一つ、忘れてはならないものが劇遊びや人形劇です。ご存じの方も多いかも知れませんが、ブルガリアの人形劇は世界的にも高い評価を得ています。ソフィア、バルナ、ブラツツァなど各地の都市には人形劇場があり、国際フェスティバルで賞をとった劇団もあります。親子で人形劇場に足を運ぶのも家族の楽しみとなっています。ちなみにこのブルガリアの人形劇団ですが、一、二年に一回位の割合で日本でも公演しているようです。

では幼稚園から帰ったあとはどのように過ごしているのでしょうか。お天気がよくて、時間があれば、両親と一緒に公園に散歩にでかけます。公園には、スポーツ施設や遊具が置かれています。家のなかでは、お気に入りのおもちゃで遊んだり、テレビを見たり兄弟がいればドミノなどのゲームを楽しみ

ます。また裕福な家庭の子どもたちは、レゴやコンピュータゲームで遊びます。コンピュータゲームは一人で遊ぶゲームなので、賛否両論があるようですが……。

子どもたちのお気に入りのお祭り

一番好きなものは、何といっても「クリスマス」。幼稚園で、子どもたちはいろいろな衣裳をつけ、先生と一緒にクリスマスコンサート準備をします。サンタクロースと雪の女王がやってきて、子どもたちにプレゼントを渡します。

つぎに好きなお祭りは三月一日に祝われる「グラニーマルタ（マルタおばあさん）」です。グラニーマルタは三月の月の精で、十二月の月のなかでは、唯一の女性です。この日、幼稚園には、グラニーマルタがやってきて、子どもたちに「マルテニツァ」という赤と白の毛糸で編んだフリンジ（これは、春のシンボルで健康と美を表しています）を渡します。



▲クリスマスコンサートの舞踏会

子どもたちはそれを胸につけたり手首に巻きます。そしてちようちよやつばめ、こうのとりのなど春を知らせる生き物に初めてであったときに「マルテニツァ」をはずすのです。その後これを木につるし、良いことが起こるようにお祈りします。

ブルガリアでは幼稚園が終わったあとに子どもたちが家族とともに過ごしていることが印象に残ります。しかし、こういったブルガリアの家族も今転機を迎えています。次回はデイミトロフ教授の「子どもたちの絵」を手がかりにした現在のブルガリアの家族についての論文をご紹介します。

参考文献 Ivan Dimitrov 'Preschool Care and Education in Bulgaria' 1995

Cation in Bulgaria' 1995

東欧を知る事典 平凡社

(保育研究グループはるにれ)

編集後記

今月から「子ども時代と私」の連載が始まりました。戦時下に子ども時代を過ごされた大先輩の方々がご自身の幼少時代をどの様に記憶されていらっしやるのかを、貴重な資料とさせていただきたく企画致しました。そこから逆にこれからの幼児教育の中で大切にしていこうに思いを巡らせることができればと考えています。

* この連載のスタートと期を同じくして、今月号には、二十世紀の終わりと二十一世紀への橋渡しを考えさせられる記事が目だったように思います。

本誌の創刊も二十世紀と共に始まったことを思うと、隔世の感がするとともに、私たちが大切にしたいものは脈々と続いて変わらざるにあることを思われます。ただ現実の環境には、それを行うために多くの障壁があるのも確かです。それを一番痛切に感じているのは、子どもたちと日々を過ごされている保育者の方々かもしれません。しかし「保育の実践研究について考える」の記事の中に書かれている「日々の保育活動と深く結びつき、より充実した保育を実現できる方向で実践者を生き生きとさせるものになる」という保育現場からの実践研究が、それらの障壁を乗り越えていく一つの力になるのではないかと考えます。

このような記事を載せていく企画も現在検討しています。

(田)

幼児の教育

第九十五巻 第五号

(一九九六年五月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

発行 平成八年五月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112東京都文京区大塚二―一―

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108東京都港区三田五―二―

発売所 フレーベル館

〒113東京都文京区本駒込

六一―四―九

☎〇三―五三九五―六六二三(営業)

☎〇三―五三九五―六六〇四(編集)

振替 〇〇―一九〇―二一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

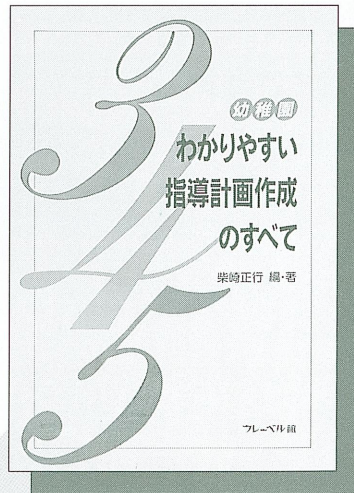
☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

新刊

幼稚園 わかりやすい 指導計画作成 のすべて



新しい幼稚園教育要領の
主旨に沿った、
年齢別指導計画。
◎年間指導計画
◎各月の月案例
(子どもの姿、保育のポイント付)
◎週案例・日案例
◎幼児指導要録の記入例
実践に基づく実例及び、計画立案の
プロセスがわかる解説付。
新しい保育観にそった実践のために
役立つ一冊です。



柴崎正行 編・著

B5判 304頁 定価2,600円(本体2,524円)

キンダーブックの
フレーベル館

倉橋惣三選集(第五巻)

上製本ケース付き B6変形判 512頁 定価3,500円(本体3,398円)

第五巻は、今まで単行本に収載されなかった雑誌への寄稿を集めた。その執筆活動は広く、児童教育、発達心理学、教師論、家庭教育、児童文化、そして随想、絵本など多岐にわたる。倉橋惣三の現代につながる先駆的教育論と、倉橋の全体像が把握できる一巻である。

倉橋惣三・著



わが国の幼児教育の理論を確立した倉橋惣三の教育論・随筆などを集大成した定本です。今でも保育界においては読まれ、語り継がれて保育者にとっては座右の書。

- | | |
|--------------------|---------------------|
| ① 幼稚園真諦・子供讃歌・フレーベル | 定価3,000円 (本体2,913円) |
| ② 幼稚園雑草 | 定価3,000円 (本体2,913円) |
| ③ 育ての心・就学前の教育他 | 定価3,000円 (本体2,913円) |
| ④ 保育案他 | 定価3,000円 (本体2,913円) |

上製本各巻ケース付き B6判 416~472頁

キンダーブックの
フレーベル館